

## [ 第 4 報告 ] 「ドイツの生ゴミ処理状況とレインボープラン」

福沢啓臣氏（ベルリン自由大学准教授）

1991～93年に長井市に住むこととなり、長井市の人たちといろいろな付き合いができた。ここで感じたのは長井市の人々は郷土愛が強く、そういう地域だからこそユニークなプロジェクトが成功したのではないかと思う。

レインボープランについて、社研で取り上げられるにあたって、ドイツに同じようなプロジェクトがないか探してみた。まずドイツの友人、緑の党、環境省、農林省の人たちに話を聞くと、生ゴミ処理自体はあり、堆肥化も行っている。しかし地域内循環という形ではないという。

地域にとらわれず、いろいろな形でゴミ処理を行っているところまでは話が進む。しかし地域であるイニシアチブを持ったグループが主体的にコンポストセンターを動かして住民に堆肥を頒布したり、堆肥を使った農産物をその地域の市民が食べるといった循環的なプロジェクトは残念ながら今のところないということだった。ドイツ以外でEU域内でも、台所と農業を結ぶ地域内循環のまちづくりプロジェクトはないとのことだった。

ドイツではゴミ処理ということに関して、日本より全体的に進んでいると思う。ドイツでは80年代からスーパーで買い物をするとき、袋は有料である。80年の半ばくらいまで無料だったので日本と同じように大量投棄という形でそれを埋めていた。ご承知のように、緑の党も70年代後半から80年代初めにかけて党として成長し、そういった人たちの意見が通り、無料でビニール袋を配るのはゴミの増加につながるので結局有料化することとなった。緑の党が出発したのは、処理ができない原発の核廃棄物を作り出すのはよくないということで、原発に反対したのも出発点の一つである。

例えば、96年くらいに循環経済廃棄物法というような法律ができ、全てのものをできるだけリサイクルすることになった。法律の一番初めには、なるべくゴミを出すなと書かれている。もしゴミを出すのであればなるべく再利用できる形にし、それが難しいゴミの場合に有料で処理する仕組みとなっている。

市民レベルでのゴミ問題はどうなっているのだろうか。私の住居の建物には14世帯45人が住んでおり、裏庭にゴミの容器がいくつか立っている。ゴミの容器は高さ約130cm、大体280、90kgまで入るもので、それが十数本あり、分別回収している。一番多いのが黒い色の容器で、そこには原則的に何でも入れてよいことになっている。ドイツでは石炭ストーブで暖房をとる人たちがおり、その灰も入っている。

青色の容器は紙類を入れる。黄色の容器はプラスチック、ビニール類。緑の容器はガラスを入れ、色つきのビンと無色のものは分別する。生ゴミは他の容器と比べて半分くらいの大きさの茶色の容器が1本だけある。120、70kgまで入るもので、のぞいてみるとあまり入っていなかった。私の住居の建物の住民はあまり生ゴミを出さないようである。確かにドイツ人のライフスタイルは、日本人の家庭比べて生ゴミ、食べ物から出るゴミは非常に少ないようである。では庭付きの一軒家に住む場合はどうかというと、大体自分の家の庭の片隅にコンポストコーナーを大体持っており、そこでできる堆肥を園芸用に使っている。全ドイツの6割くらいが庭を持たない集合住宅に住み、4割くらいが庭付きの家に住んでいるが、私の住むベルリンのような大都市では、生ゴミは小さな容器に少なく出すという感じである。

ゴミが収集されてどうなるか、ベルリン市の方に問い合わせたところ、清掃会社に直接問い合わせるようにとのことであった。ベルリンには340万の住民がいるが、年間5～6万トンの生ゴミを集めている。集めた生ゴミは分別して、植物性の生ゴミは堆肥化し、動物性の生ゴミは131に熱して圧力をかけて滅菌した後、豚の餌にしている。あるいはガスを発生させてエネルギー源としているというような答えが返ってきた。植物性の生ゴミから作られた堆肥は、ベルリン市ではスーパーなどで販売しており、一般の市民が買うことができる。他の都市に聞いてみると、ドレスデンでは、46万人の人口だが、3万トンの生ゴミを集め、生ゴミから作られた堆肥は一般には売られておらず、市の公園で使われている。

次に、フライブルグという南西ドイツにある都市は、市長から住民全てが環境問題に非常に意識が高く、おそらくドイツの都市の中で一番環境問題に取り組んでいる町である。いろいろ調べてみるとフライブルグの住民がもともと意識が高かったわけではなかった。近くにライン川が流れており、そのほとりに原発を作ろうというプロジェクトがあり、それに反対する人々が中心となって80年代にフライブルグの住民の環境意識を高めたということになっている。そのフライブルグは21万人の人

口で1万1千トン位の生ゴミが出ており、作られた堆肥は一般の農家にも売っているとのことである。ベルリン、ドレスデン、フライブルグというように大都市、中都市というように調べてみたが、異物の混入率は5%くらいとのことであった。

もっと小さな都市はどうか、人口5万人ほどの都市に聞いてみたところ、生ゴミの収集はしていないということであった。なぜかというと地方の都市の場合には、庭付きの家に住んでいる住民の比率が高いので自分たちの庭にコンポストコーナーがあるためである。大体人口10万人くらいを境にして、生ゴミを回収するかしないかが分かれるようである。

緑の党が勢力を得てから、ますます市民の間で有機農業による農産物を食べる傾向は強くなってきている。しかしまだ国民の2~3%といわれている。階級的に見ると中流から上の人たちそれよりもインテリに近い人たちが主に有機農業による農産物を購入している。有機農法による農産物は普通のものより30~50%割高で購入者の裾野がなかなか広がらない。

2000年に狂牛病の問題がドイツに起こり、一時牛肉の消費量が半分に減った。ドイツのそれまでの農業政策が批判され、2001年1月に農林省を組織替えし、名前をかえた。それまで社民党の人が大臣であったが、緑の党の党首であったレナーテ・キューナストという女性が安全食糧農林省(直訳すると消費者保護農林省)の大臣となり、辣腕を振っている。キューナスト大臣が掲げた政策は、有機農業による食糧品消費量をそれまでの2%から10%に引き上げることで、工業化された農業、食糧生産を真っ向から否定するものであったので、ドイツの農業団体、あるいは食糧生産業界はキューナスト大臣に反対しているが、大臣の方も次々と新しい政策を打ち出している状況である。大臣の掲げた一番具体的な政策は、量ではなく質をというキャッチフレーズと10の項目を挙げ、目指す農業を次のように定義している。

化学的な除草剤を使わない、化学肥料を使わない、家畜にやさしい飼育、水と土と空気を汚染しない、動植物世界にやさしい、種類を減らさないような農業、閉じられた栄養サイクルによる循環型農業、規則を確立し、コントロールによる安全性の確保、食糧品生産における透明性、省エネ農業、遺伝子組み換え技術を農産物に応用しない、ということで、先ほど竹田氏の報告にもあったようなことが大体含まれている。但し地域内循環、町づくりという観点は入っていない。

ゴミ処理、生ゴミ処理、有機農業と見てきて、ドイツにもレインボープランに相当する部分があると思うが、地域内循環型の農業と台所を結ぶ町づくりといったものはドイツ、あるいはヨーロッパには今のところない。レインボープランはこれからの町づくりのモデルとして将来性が非常にある、あるいは日本だけではなく世界的なモデルになるのではないかと。特に発展途上国などにおいて地域の住民の意識を高める形で、自ら主体的に何かをする方向で新しい町づくり、発展モデルになるのではないかと。

<記録：飯窪秀樹>